

表1 2004年ルリガイ計測値1 (殻高)

殻高(mm)	国分	雨晴	計	国分	雨晴	計
39	.	1	1	.	.	.
38	.	.	.	2	1	3
37	.	.	.	1.45%	1.56%	1.48%
36
35	2	.	2	.	.	.
34	.	2	2	.	.	.
33
32	3	1	4	18	9	27
31	10	2	12	13.05%	14.06%	13.37%
30	5	4	9	.	.	.
29	8	5	13	.	.	.
28	5	1	6	.	.	.
27	11	4	15	37	21	58
26	8	2	10	26.81%	32.81%	28.71%
25	5	9	14	.	.	.
24	9	5	14	.	.	.
23	6	3	9	.	.	.
22	8	1	9	33	14	47
21	8	3	11	23.91%	21.88%	23.27%
20	2	2	4	.	.	.
19	4	5	9	.	.	.
18	7	3	10	.	.	.
17	6	6	12	26	15	41
16	2	.	2	18.84%	23.44%	20.30%
15	7	1	8	.	.	.
14	7	2	9	.	.	.
13	5	1	6	.	.	.
12	5	.	5	21	4	25
11	2	.	2	15.22%	6.25%	12.38%
10	2	1	3	.	.	.
9	1	.	1	.	.	.
8	.	.	.	1	0	1
7	.	.	.	0.72%	0.00%	0.49%
6
5
計	138	64	202	100.00%	100.00%	100.00%

数が少なく殻の計測はしていない。殻の最大は殻高39mm、重量2.3gのものもあったが、多くは殻高31mm以下重量1g以下、小さいものは殻高10mm程度で重量0.1g未満であった。

ルリガイは暖海に浮漂する群体クラゲの1種ギンクラゲ *Porpita pacifica* LESSONを餌として、

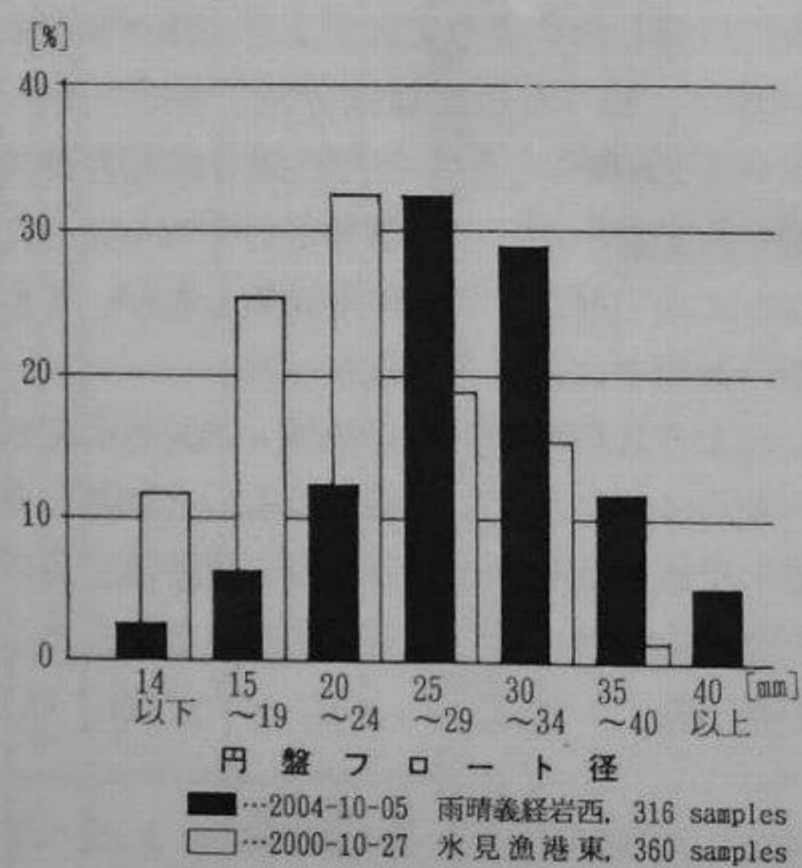


図1 漂着したギンクラゲの円盤フロートの大きさ

表2 2004年ルリガイ計測値2 (重量)

重量(g)	国分	雨晴	計
2.5	.	.	.
2.4	.	.	.
2.3	.	1	1
2.2	.	.	.
2.1	.	.	.
2.0	.	.	.
1.9	.	.	.
1.8	.	.	.
1.7	.	.	.
1.6	.	.	.
1.5	.	.	.
1.4	1	.	1
1.3	.	.	.
1.2	.	1	1
1.1	.	2	2
1.0	6	.	6
0.9	4	3	7
0.8	8	2	10
0.7	10	7	17
0.6	12	6	18
0.5	18	6	24
0.4	13	8	21
0.3	15	8	23
0.2	16	10	26
0.1	19	7	26
0.1未満	16	1	17
計(個)	138	64	202

その群れを追って浮漂するとされる。2000年秋の場合もそうであったように、今回もギンクラゲが多数漂着していた。

雨晴でルリガイと一緒に採集したギンクラゲの円盤フロートの大きさを計測して2000年秋季に380個を計測した氷見漁港東での結果と比較した(図1)。計測した316個についてみると径25mm~35mmがほとんどで2000年秋季よりはやや大きいものが多い。ただし、この比較は300個体以上採集できた地点の比較であって、異なった採集地点を調べればこれとは異なる結果になるかもしれない。この点に関しては今後さらにデータを増やしたい。

文献

邑本順亮, 2000, 珍しいルリガイの漂着, JANOLUS, 103, 18.
 邑本順亮・布村昇, 2001, 2000年秋季における富山湾西部海岸への暖流系大型浮漂動物の漂着, 富山の生物, 40, 43-48.

南の島にワラジムシを求めて6
 - 八重山石垣・与那国 -

布村 昇

富山市科学文化センター〒939-8084 富山市西中野町1-8-31

Short Collecting Trips to the Subtropical Islands-6

Noboru Nunomura

Toyama Science Museum, Nishinakano-machi, 1-8-31, Toyama-shi, Toyama 939-8084, Japan

今年は夏にポルトガルのワラジムシシンポジウムにも出かけたので、秋には遠出を控えようと思っていたが、やはり秋も深まると我慢できなくなり、予算や議会のスケジュールを見計らって11月末に八重山へと向かった。石垣への直行便は東京、大阪、名古屋、福岡があるが、名古屋経由だけが席が空いていたので、また名古屋経由での石垣行になった。

今回は当初、本邦最西端の与那国と琉球最南端の波照間の両方を調査したいと考えたが、万一、季節外れの台風なども考え、与那国だけにし、代わりに石垣島の調査を加えた。勤務を終え、最終の名古屋行きの列車に乗り、名古屋に泊り、その翌日、お昼前の飛行機で石垣へ飛んだ。

石垣へ

午後3時過ぎに石垣空港に着いた。いつものことながら、飛行機から降りたときの温度差を含んだ風というか空気の違いがたまらない。

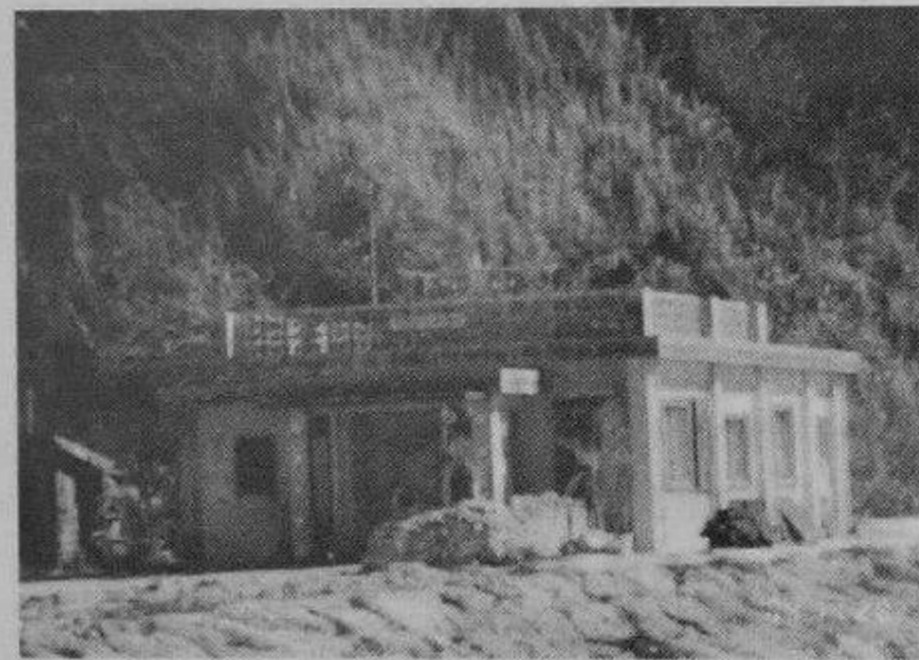
民宿の送迎車で、白保へ行った。日が暮れるまでの時間が惜しいので、最低限の荷物を持ち、近くの海岸で海浜生息種を探した。潮もすでに高くなっていてせいもあるが、取れたのはフナムシのみであり、幸先は良くないと思われた。富山よりかなり日没が遅いとはいえ、陽が落ちそうな時刻になり、宿に帰った。



1. 石垣島の白保海岸

与那国へ

翌朝、空港に戻り、与那国行きの飛行機にのる。わずか25分のフライトで与那国空港に着いた。荷物を受け取り、早速レンタカーの手続きをする。若葉色の小型車で少々恥ずかしかったが、仕方がない。近くのホテルへ送ってあった荷物をとり、出発だ。まずは南の比川に行く。観光案内書によるとひなびたところのようで、閑散として人が誰もいないと予想したが、人が結構いた。浜には休日のためか遊びに来ている人がいた。また、数名の女性が与那国馬に乗っていた。最近、ここには「ドクターコトー診療所」というテレビ番組の舞台となったところであることが分かり、テレビのセットの建物も置かれていて「志木那島診療所」と書いた四角い建物があった。建物の屋根の上には既にレンタカーでやってきた若い女性3名がいた。その後も自転車で来た青年が立ち寄りたりし



2. 比川浜にあったドラマのセット

ていて、与那国の新名所となっているらしいことがわかった。私はワラジムシ探しをするが、山が砂浜に下りているとことであり、大きな岩盤があるので、いろいろな潮位に対して多様な生息場所が提供されていることになり。絶好の生息する場所だなど直感したが、実際はこのような環境に多いフナムシもタマワラジムシもいなかった。

しかし、細く白いヒメワラジムシ科のものが確認された。これがみられただけで、与那国まで来た会があったと直感した。いままでこの仲間は与那国島からはほとんど知られていなかったのでは

る。

空腹を感じたので、時計を見ると昼過ぎになっていた。いったん祖内に戻り、食事場所を探すことにした。しかし、車から探すと駐車場のある食堂は見当たらない。仕方なしにホテルへ戻って、そのレストランで豆腐チャンプルーで空腹を癒した。

午後一番は島の東端の東崎へ行くことにした。さすがに観光地だけあって、観光バス一台を含め数台の乗用車が来ていた。八重山層群の砂岩の急斜面の海岸への道は急で、エンジンプレーキを最大にして、慎重に下の駐車場まで降りた。その先は馬糞が点々としており、その中を海岸まで歩いて下りた。石灰岩の穴だらけのごつごつした岩であった。

ここではフナムシだけが見られたが、穴だらけの岩に逃げ込むので、ほとんど取れなかった。2,3頭採るのがやっとであった。



3. 比川風景

東崎から南東の道沿いには風光明媚な観光地が続く。サンニヌ台、軍艦岩、立神岩などの名勝が続く。海底遺跡かということで論議をかもしているのもこの延長上にある。私はワラジムシ探しが目的なので良い林がないか探しているうちにまた、昼前にいった比川への道へ戻ってしまった。

今度は細い林道に入ってみることにした。「満田森林公園」という名前が「良い森林」を連想したためである。車がすれ違ふことが困難な細い道を行くとワラジムシのいそうな照葉樹林があった。できるだけ凹んだ地形の湿度の高いところを

選んだ。モリワラジムシが多く見つかったので嬉しくなり、道路わきの近くの溝の落葉も取ってシフティングを試みた。ここからは大型のヨナゲニモリワラジムシが大量に出てきたので他の種類もいる可能性があると思われ、力を入れて採取をした。乾燥期には側溝の方が良いと感じた。



4. 空港から森林公園方面の山

再び、この林道に戻り、午前の調査地の比川浜を通り過ぎ、隣のカタブル浜で飛沫帯を調べることにした。すでに干潮の時刻は過ぎていたので、飛沫帯を中心に、とにかく砂を掘ってみた。だめでもともとと思って掘ったのであるが、15cmか20cmほど掘ったところに、白いタマワラジムシと白いハマダンゴムシが出てきた。このタマワラジムシは背中に十字架マークがあり、たしかに附属肢の一部に黒い斑点のあるマダラタマワラジムシである。この種類は私が記載したものだが、実際に野外で会えると何か嬉しいものである。もっとも、記載のときは背中の十字架マークがなかったような気がする。標本となってから消えてしまったのかもしれない。

ある程度の満足を得たので、西端の久部良集落へ行ってみようとした。南牧場線を西へ走るのだが予想以上に快適な道路だ。しかし、牛や馬の糞が膨大な量で道路上に点々としていた。これを避けながら走らないと、タイヤが糞だらけになってしまう。途中、鳥等が逃げないように道路が溝になったテキサスロードがあったりしたが予想外に



5. マダラタマワラジムシが発見されたカタブル浜の生棲場所

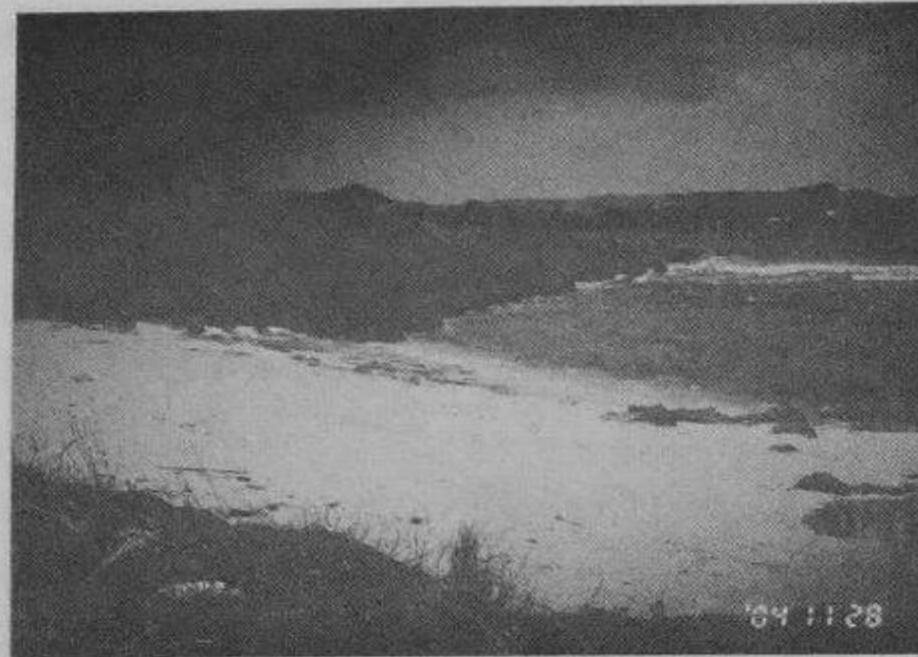
早く久部良についた。ここは祖内とともに人の多いところであった。しかし、考えが変わった。カタブル浜での思わぬ収穫からここでは採集をしなかった。その先のダンヌ浜が良さそうに思えたからである。現地へ行ってみるが、予想以上に乾燥していてフナムシのみであった。

夕刻が近づいたので、ホテルに帰った。部屋に戻り、荷物の整理をしようとする、筆記用具を落としてしまったことに気づく。車の中にも無いし、部屋にも無かった。仕方なく、祖内のよろず屋に行った。しかし、鉛筆はあるが、鉛筆削りはないのでシャープペンシルを買ったが価格が分からず時間をくった。そんなこんなでさすがの東経123度の日本最西端の島も真っ暗になってしまった。

翌日、朝食前の少しの時間、名勝ティンダバナの北にある県道を歩いていき、道の脇の石の下をめぐってみる。ここでは期待はしていなかったが、最初はホソワラジムシが1頭出てきた。続いてコシビロダンゴムシ類がたくさん取れた。意外なところにいるものだ。

離島の一般的特徴であるが、富山で言えば外来のオカダンゴムシやワラジムシがいるところを、外来種のホソワラジムシを除けば在来種が占めている。ホソワラジムシもここでは数は少なかった。

朝食をすませ、宿代の精算をして、ホテルを出るが、まだ8時であったので、その後の時間を使い、再び森林公園へ行ってみた。昨日とは少し違



6. ダンヌ浜

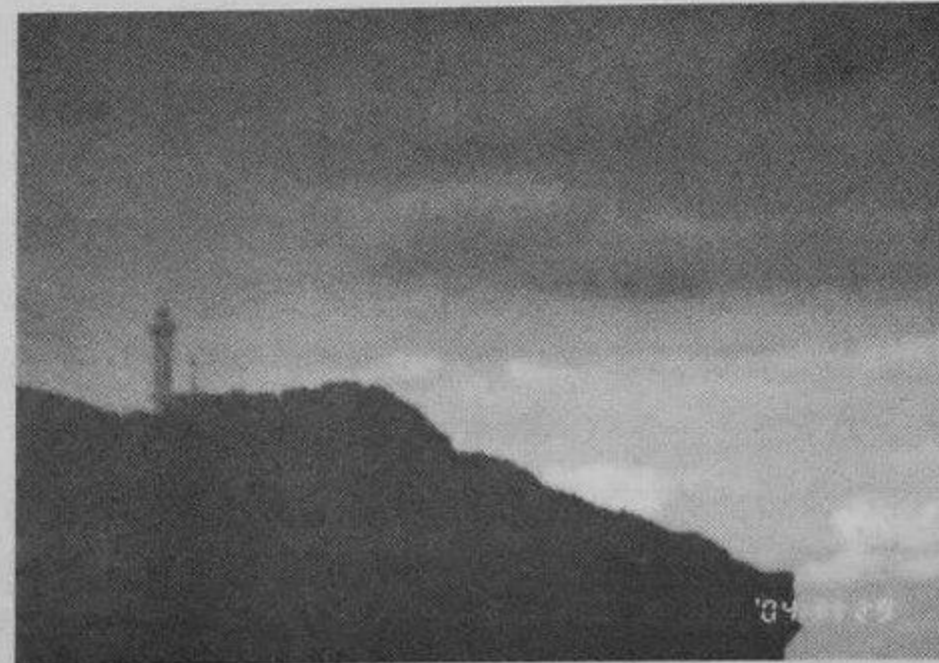
う地点を調査をすることにした。するとーリングの若い2人のお嬢さんが向こうからやってきた。「何やっているんですかア」といつもの質問。面倒なので、「前は昆虫採集みたいなものです。」などと言っていたが、「ダンゴムシを調べています。」と正直に答えた。「ヨナグニモリワラジムシ」などといってもしょうがないので、「ほら、たくさんいるでしょう。」とシフティングしたものをみせる。「ほんとう」といって、立ち去った。

昨日と同じとは思ったが、少しだけ離れた場所でやや深く探ってみたり、溝をとってみると、例の白いヒメワラジムシがいて、大きな収穫であることは確実なので、ツルグレンでもとるため、土も採取した。

その後、林道を西に行き、わが国最も西の西崎へいった。この時刻にも観光客がいて、男性の観光客が「何も無い島ですね」などと話しかけてくる。こちら興味があるのは観光でなく等脚類なので、迷惑だと思いつつも相槌だけはうっておいた。ここも、結局は観光地と整備されていて等脚類は1頭しか見つからなかった。

そろそろ、車を返す時間が近づいたので、最終の調査地を久部良の町に近い、久部良バリ付近にし、そこへ行って見た。人口を減らすため、妊婦を飛ばせ、胎児も母親も死に至らしめたという八重山にあったこの世の地獄というべき悲惨な歴史をものがたる場所である。

ここでは採集はできなかったが、ここで荷物をまとめ、近くの郵便局から送り、レンタカーを返



7. 日本の最西端、西崎

して飛行機を待った。

そろそろ出発かと思ったら、石垣からの飛行機が1時間遅れるとのこと。1000円の食事券が配ばられたが、レストランは閉鎖していた。売店はあるが、泡盛やTシャツばかりで、弁当もパンもなく、わずかに手作りクッキーと黒糖が売られているだけ。クッキーをいくつか、うっちゃん茶ではおぼって、昼食を終えるが何か満足感がない。石垣へいったら好物の八重山そばを食べようと自分に言い聞かせ、石垣に戻った。

再び石垣へ

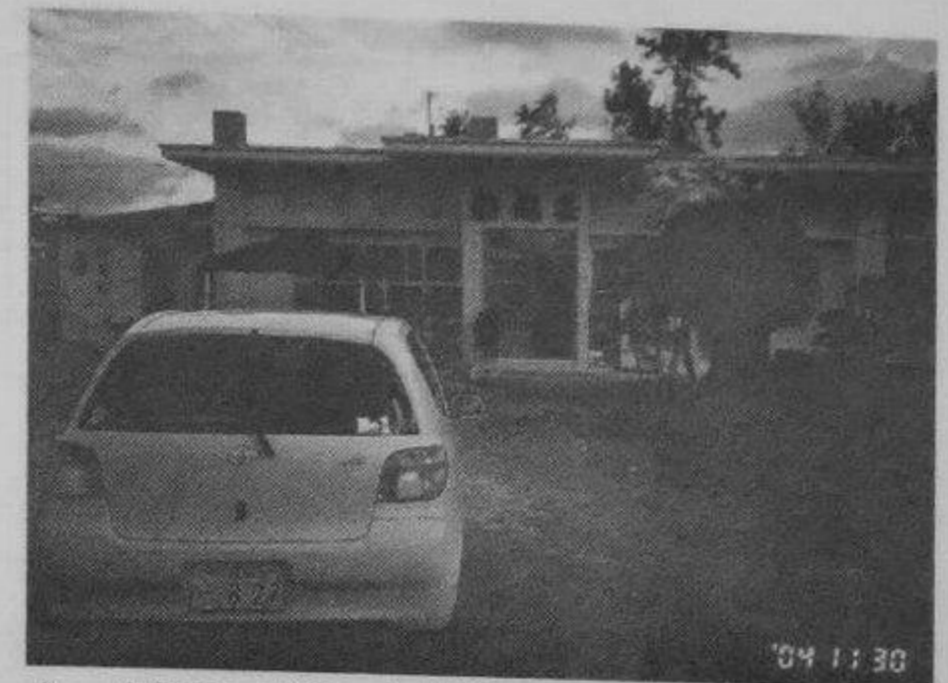
石垣で再びレンタカーを借り、好物の八重山ソバの店を探した。街を抜けて、広い敷地の蕎麦屋を見つけ、思いきり、肉片の入ったソーキそばを食べる。この味がなんとも八重山的で、これを食べないと八重山に着た実感が完全でない。帰ろうとしたとき、車のサイドブレーキが解けなかった。30分ほど経って市内から見に来てもらう。この間、20分ほどであったが、採集を試みたところ、予想に反してモリワラジムシなどもみられた。

伊原間の民宿で荷物を受け取ろうとしたが、鍵はかかっていないが、誰も出てこない。しかたなく、とりあえず北端の平久保岬まで行くが、景色は良いが収穫は無かったので、ちょっと落ち込んでいた。帰路に何気なく車を止めた林縁に溝があり、調べてみるとここから大型のモリワラジムシなどがわんさと出た。数日晴天が続いたあとは溝に限ると思った。



8. 石垣島の北端の平久保岬から

日も傾いてきたので、車を走らせ、宿に車をとめた。後ろにワラジムシが隠れていそうな40cmくらいのサンゴの塊があったので持ち上げてみるとオキナワスカワマイマイが3頭いた。ほかに真っ黒の太い紐のようなものがせわしく動いている。紐より黒のビニールで被覆されたコードのようであった。目が見えないらしく、前部5cm程度を前に出たり、引っ込めたりして、場所を確認しているようであった。当初、何な仲間かまったく分からない。すばやく動き、長さ20cm、幅5mm程度。長い円柱状で体節はない。一様に真っ黒で附属肢も触角もまったくない。海の中にはいろいろ未知なものがあるがまして、陸上、しかもこのような何に近いのかなと考えた。扁形動物のコウガイビルのように平たくないし、体が粘液で覆われていない。円形の断面のような前端には口も鼻も目も見えないようだ。円形で表面は真っ黒でうろこもないようにみえた。類線形動物、すなわちハリガネムシの仲間も考えたが、ハリガネムシとは比べものにならないくらい太いし、比べようもなく速く動く。ミミズのように体節も環帯もない。アシナシイモリでもないし、などと考えていると土の中に潜ろうとして辺りをチクチクと刺すような動きをはじめた。それでこれが噂のメクラヘビ科のブラーミニメクラヘビ *Ramphotyphlops braminus* と判明した。その時は恥ずかしながら分らなかった。とりあえず生態を写真撮影し、その後、アルコール漬けにしようとして部屋までとりに行き帰ってみるとすでにいない。周りの石の下にもいな



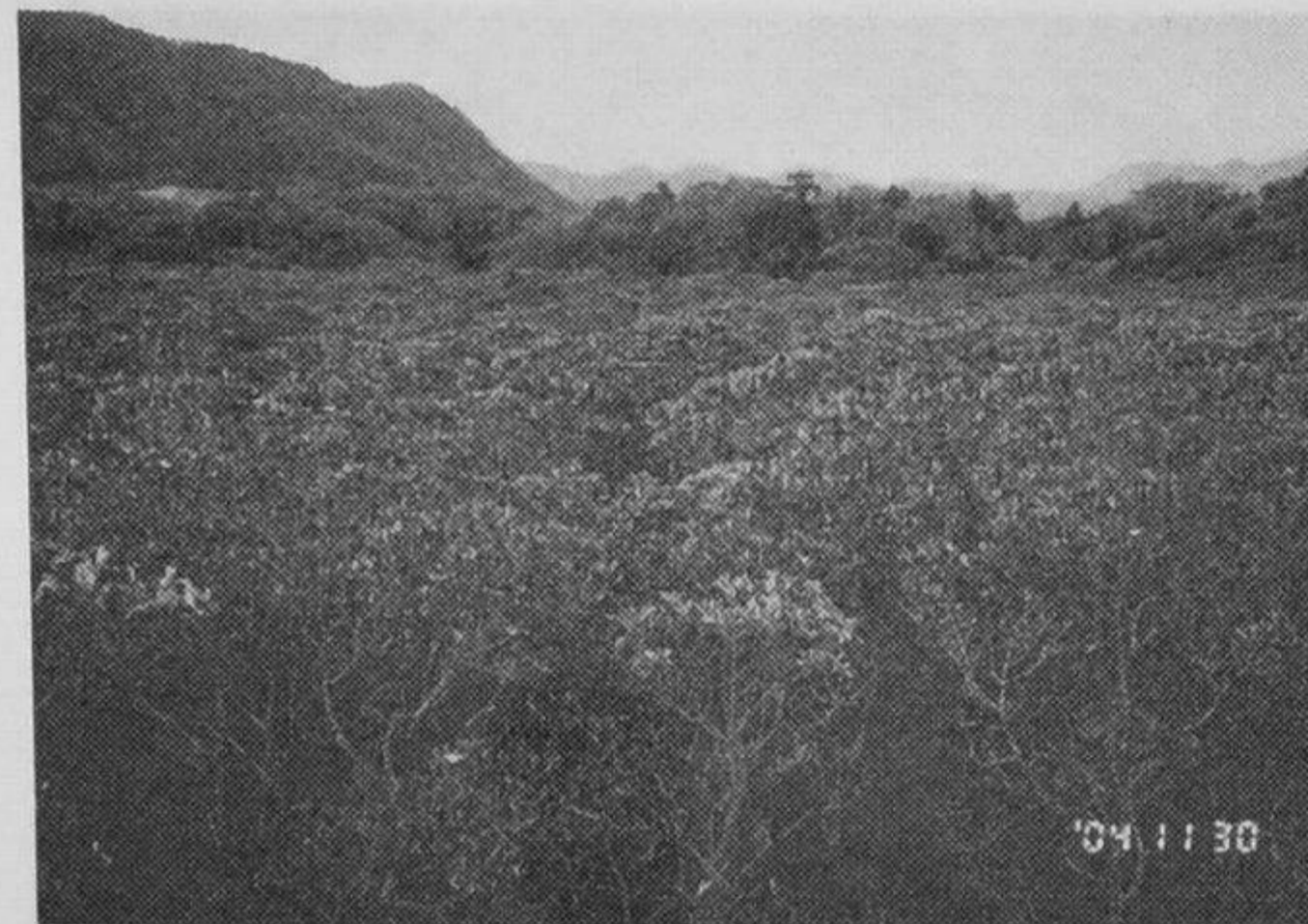
9. メクラヘビのいた場所

かった。日も落ちてあきらめたが、カメラや標本ビンを取りに行ったことが悔やまれた。

宿には私ともう一人、那覇から来たダイバーが宿泊していた。関東の人だが、ダイビングが好きで沖縄に移ってきたいらしい。夕食時、例の虫の話や、私がダンゴムシを調べているという、ダンゴムシの質問が矢継ぎ早であった。釣ってきた魚が食卓に出ていた。宿の主人の息子さんが仕事から帰り、宮古島でゴルフか何かのコンペがあったらしいご主人も帰ってくる頃には、にぎやかになっていた。泡盛談義が盛り上がったころ、近所の青年やおじさんたちが多数集まってきた。誰かの命日とのことで仏壇にお参りに来た。近所の付き合いの深さを感じた。都会ではまったくいいほどなくなってしまったものだ。

翌朝、再度ヘビがいるか調べるが、マイマイはまだいたがやはりまったくみつからなかった。気を取り直して、ワラジムシ探しのドライブを再開した。

途中、伊土名の吹通川のマングローブ林で整備された駐車場があり、そこでとまった。島の南の宮良川のマングローブに比べて大変明るかった。駐車場から下に下りていくと海岸にでた。貝やサンゴの破片がたくさん打ちあがっていた。貝からの量と種類が多かったが、中ではユウカゲハマグリ、ニッコウガイやハナマルユキなどが目立った。砂浜のためか、マキガイよりも二枚貝が圧倒的に多かった。また、マングローブのオヒルギの花もたくさん混じっていた。



10. 吹通川河口のマングローブ

川平、崎枝、於茂登トンネル周辺、バンナ岳など生息しているような場所を調べたが、とにかくどの場所へ行ってもすべて乾きすぎているので、ワラジムシがいなかった。側溝にたまった落ち葉さえもカラカラに乾いていた。このような場所は雨の日から日数がたち、腐食化が進んでいるためか、ワラジムシの類よりもヨコエビの仲間のオカトビムシばかりのすみかになっていることも多かった。

今回の八重山の2つの島で判ったのは石やベニヤ板の裏にはコシビロダンゴムシやホソワラジムシ、凹んだ微地形や側溝にはヒメワラジムシ類がいる傾向が見られたが、ヒメワラジムシ類に代

わって、ヨコエビ目が出現するのは、腐りかけじゅくじゅくした環境で、全体としては大型土壌物の多様性の低い場所に多いようだ。

昼になり、帰りの飛行機の時刻が近づいたので最後の調査地を空港に比較的近いバンナ岳にした。ここでも貧果ではあったがバンナ岳は市街地に近い山で、食性の違いを除けば二上山か呉羽山にしているような感じであった。

街側の駐車場で荷物をまとめた。大きな碑があり、バンナ公園には戦中、石垣島の山中へ疎開させられマラリアで死んでいった多くの人々が眠っていることが記されていた。美しいさんご礁、白砂、緑の山の八重山にも悲惨な歴史があり、離島であるが故の幾多の悲劇に思いをはせた。

亜熱帯から、温帯の初冬の名古屋、そして富山に戻るための、着替えをし、石垣市の市街地に戻った。その荷物を送り、レンタカーを返し、空港まで送ってもらって、やっと、我慢して飲めなかったビールを再び八重山そばといっしょに食べた。

結局、今回、石垣島のワラジムシはさほど多くなかったが、さまざまな体験をできた。ドライブをしに来たような感じでもあるが、これも仕方がない。現地調査はたいへんだが、予期せぬ発見がある。いつもながら調査の後のビールは最高！

平成16年度第3回野外研修会報告
— 虻が島の植物相 —

中川定一

日時：平成16年6月20日（日）

午前10時～午後3時

場所：氷見市虻が島

目的：高等植物の調査

参加者：小川徳重、鎌仲郁之助、久保秋次、
武田宏、中川定一、本多省三、増田恭次郎、
栄君子、野間喜代美

1. 海浜植物の開花期

虻が島へは、渡し船を使わなければならないが、船が営業を始めるのは、毎年夏休み直前である。一方、海浜植物の多くの開花期は6月であるため、夏に島に渡っても海浜植物の花後で、同定するには適していない。そこで今回は、渡し船を手配したのは6月に入ってからである。

また、沿岸島の植物の同定に際しては、対岸や近くの島の植物の分布状況も参考になる。しかし、残念ながら、富山県側の沿岸は道路や消波ブロックなどで海浜植物の生育地はないため、どうしても七尾市や鹿島半島の観音島（陸続き）まで足を運ばなければならない。虻が島と観音島は環境や植生が良く似ているので参考になる。

2. 同定上問題としていた植物群

虻が島の高等植物相については、菊池（1936）、植木（1958）、氷見市教育委員会（1976）、長井ほか（1993）などによって報告されている。その中から筆者が以前から同定上問題としていた植物群があったので、以下に抽出し、今回の現地調査で確認することを目的とした。なお、1992年と2004年には男島、女島別の調査記録もあるが、今回は紙面の関係で省略した。

表中36とあるのは菊池（1936）の調査。同様に58は植木（1958）、76は氷見市（1976）、92は長井ほか（1992）、04は今回（2004年）の調査を表す。

イネ科

種名	36	58	76	92	04
ケカモノハシ			○		
カモノハシ	○				
ヨシ	○	○	○	○	○
ツルヨシ		○			

イネ科で一番勢いのある種はヨシ、カモジグサ程度であった。カモノハシは海には近いが、塩水の入らない湿地に生え、ケカモノハシは島尾浜のような浜砂に生育する。今回両種とも確認できず淡水湿地が存在しないことから、カモノハシは同定の誤りでケカモノハシは消失した可能性が高い。ツルヨシの生育記録も疑わしい。

ヤマノイモ科

種名	36	58	76	92	04
ヤマノイモ	○	○	○	○	○
オニドコロ			○	○	

ヤマノイモとオニドコロはよく似ている。環境によってヤマノイモの葉は対生になったり、互生になったりする。オニドコロはいつも互生である。今回は、ヤマノイモのみが確認された。葉元を噛んで確かめた。

イラクサ科

種名	36	58	76	92	04
ラセイタソウ		○			
ヤブマオ	○	○	○	○	
カラムシ	○	○		○	○
アオカラムシ		○			
ナガバヤブマオ	○				

ラセイタソウは、富山県の絶滅のおそれのある野生生物（富山県 2003）には絶滅と評価されているが、日本の野生植物（佐竹ほか 1982など）には分布は太平洋側とあるし、石川県側の資料には出てこない。元々から生育していなかったと考えられる。

アオカラムシとカラムシ、この差は微妙である。葉裏の白い綿毛の度合いによって、どうにでも判定できる。虻が島のものは茎の先端の小さな葉には綿毛があり、根元に近づくと綿毛が